

話しことばの助詞

—「とか」「なんか」「なんて」—

丸山直子

0. はじめに

筆者は、話しことば特有の現象として指摘される、いわゆる“助詞の脱落”について、研究してきた〔丸山（1995a）（1996）〕。「新聞読む？」のような表現は、「新聞を読む？」にすると、かえって不自然である。格助詞が現れないという現象が意味するところについて、筆者は解明しようと試みている。

格助詞が現れない格成分としては、裸の名詞の他に、係助詞・副助詞が使用されているものがある。例えば、「新聞は読む。」「新聞だけ読む。」のようなものである。これらは、格関係としてはヲ格（「新聞を読む」という関係）であるが、「を」という格助詞が現れていない。一方で、例えば、ニ格は、「彼には話す。」「彼にだけ話す。」のように、格助詞「に」を伴って使われる（「に」を伴わず「彼は話す。」にするとガ格としてしか解釈できない）¹⁾。

これらの現象において、係助詞「は」と副助詞「だけ」のふるまいは同じであろうか。副助詞にはもう一つ、「彼だけに話す。」のように格助詞の前に現れる用法がある。係助詞の方にはこの用法がない。「彼はに話す。」とは言えない。（もっとも「こそ」には「こそが」という用法が、「も」には「誰もが」のような用法が存在する。）さらに、「彼にだけは話す。」のように副助詞・係助詞を重ねて用いることもできる。筆者は、副助詞の働きと係助詞の働きを厳然と区別する水谷文法〔水谷（1991）〕の考えに則って、「彼だけに話す。」の「だけ」を“体副形成子”として捉えている〔丸山（1991）〕。つまり、「彼だけ」という表現を体言相当の連語（体連語）として捉えるのである。「彼だけ」という体連語が述語になれば、「彼だけだ」になり、連体修飾語になれば、「彼だけの」になる。格成分になれば、「彼だけが」「彼だけに」となり、その格助詞が無形化すれば、「彼だけ ϕ 話す」のような表現ができる。係助詞の場合に「彼 ϕ は話す」と解釈するのは構文的に大きく異なる把握をすることになる。

水谷（1991）で体副形成子として認めているものは、クライ、スラ、ダケ、ナド、ノミ、バカリ、ホド、マデ、等、ナドナド、等々、サエである。これらは体連語0や埋込句に付いて体連語1を形成するとされる。水谷（1991）ではルールが記号論理式で書かれているが、それを主旨だけCFG（文脈自由文法）のルールに書き直すと以下のよう

1) 同じニ格でも、行き先は「学校は行くが、塾は行かない。」「学校だけ行く。」のように、格助詞なしでも使われ得る。

になる。

体連語 1 → 体連語 0 体副形成子

体連語 1 → 句 体副形成子

水谷(1991)は、主に、書きことばを対象にして書かれている。話しことばにおいては、書きことばとは異なる助詞が使われることがある。(“話しことば” “書きことば” についての筆者の捉え方は丸山(1995b) 参照。“書かれた話しことば” の存在を認める立場に立つ。) 資料[1]を対象に、格助詞のついていない体連語を調査した結果、「とか」「なんか」「なんて」の使用が目立って見られた。そこで、本稿では、その三つの助詞について、用法を明らかにすることを試みる。材料は、資料[1]と資料[2]である。資料[1]は、86の対話(総文数: 約8,000)を書き起こしたものである。資料[2]は新聞記事なので書きことばの代表とも言えるが、中には会話文もあり、話しことばも含まれている。これらの分析を通して、「とか」「なんか」「なんて」の、文法への取り込みを図る。

1. 「とか」の用法

「とか」は、格助詞「と」と係助詞「か」が合わさって出来た語である。一般に並列表現に使用される。『岩波国語辞典』第五版において「例をあげて並べるのに使う。」と記され、『新明解国語辞典』第三版において「思いつくままに顕著な例を列挙する事を表わす。」とされるものである。国研(1951)においては、「事物や動作・作用を例示的に並列・列挙する」並立助詞とされている。水谷(1991)では、“並べ体連語”や“並置体化連語”を作る“重畳辞”としてルール化されている。中心となるルールをCFGで書くと、次のようになる。

並べ体連語 → 体連語 重畳辞 1 体連語 (重畳辞 1)

並置体化連語 → 要素句 重畳辞 2 要素句 重畳辞 2

但し、

重畳辞 1 = {か, ダカ, ダトカ, ダノ, ト, トカ, トヤラ, ナリ, ノ, ヤ, ヤラ}

重畳辞 2 = {か, ダノ, トカ, ナリ, ノ, ヤラ}

並べ体連語とは「犬とか猫(とか)」のようなものであり、並置体化連語とは「行くとか行かないとか」のようなものである。

一方で、『岩波国語辞典』第五版には、次のような記述がある。

② [連語] 下に「言う」「聞く」などを伴って、内容が不確かであることを表す。

「橋沢—いう人」

これは“引用”にかかわるものである。引用の「と」の役割を引き受けて、それに不定の「か」が付くことで、不確かさを表す表現になっている。「とか」においては、“並列”の働きとともに、この“引用”の働きが重要で、これをルール化する必要がある。

さらに、話しことばにおいては、もはや並列とは言えないような用法がある。例えば、#1のような文は、#2のように並列して述べているものと違って、対象をはっきり提示す

るのを避けて、ばかして提示する機能をはたしていると言えよう。

#1 近くにゲレンデとかあるんですか。(資料[1], p.374)

#2 和食とか, 洋食とか, 中華とかあると思いますけど。(資料[1], p.407)

並列の用法が基本ながら、他のものを示唆しつつ単独で使用する用法が定着し、他のものが具体的に存在しない場合でも、断定的提示を避けて、「とか」が使用されるようになったものと考えられる。並置体化連語に単独の用法があることは、水谷(1991)でも指摘されている。

これは並置すべき他の可能性を言外に託する技巧から生じた形であらう。最近には特に若い層で、さうした意図とは多分無縁に、しかしその技巧が成り立つ基盤は利用して、自分の発言の責任を軽減・回避する為にか、かゝる姿の表現が濫用される。(p.123)

「とか」を伴う並べ体連語にも同じ現象が現れていると言えよう。そして、もはや並べ体連語と言えないところまで来ていると感じる。

「とか」の用法を資料[1]において調査したところ、複数の語の並列として用いられていたものが19例、単独で用いられていたものが62例存在し、単独のものが圧倒的に多かった(引用2例を含む)。#1, #2は、ガ格の成分だったのに対し、#3はヲ格、#4はニ格、#5は時を表す成分(水谷文法では、格成分でなく情況語(副詞的修飾成分)の一種である局面連語)である。

#3 荷物とかおいてても平気なんですか。(資料[1], p.472)

#4 新幹線とか乗っちゃうと、(資料[1], p.497)

#5 高校の時とかやりませんでした?, 創作舞踊。(資料[1], p.356)

これらは、体連語に「とか」が付いて体連語を形成し、それが、格成分になったり副詞的成分になったものと考えられる。「荷物とか ε_9 」「高校の時とか ε_5 」と解釈できる²⁾。

また、並置体化連語については、#6のように「たり」に続いて並置体化連語を形成するものがある。

#6 お友達とか呼んで、ご馳走したりとか。(資料[1], p.351)

これは、水谷(1991)にその記述がない。「～したり～したり」や「～するとか～するとか」はあるが、「～したりとか～したりとか」はないのである。確かにこれは不整表現に近い。書きことばにはまず現れないであろう。しかし、話しことばにおいてはかなり広く用いられている用法である。

引用の例としては、#7, #8のようなものがあつた。

#7 お土産とかいうと、広島では。(資料[1], p.464)

#8 生水飲んだらいかんとかあります。(資料[1], p.473)

これらは、「お土産とか」という「と」が無形化したというより、「とか」そのものに引用の機能が含まれていると考えた方が自然である。

2) ε_9 : 無形の格表示 ε_5 : 無形的情況化

一方、資料[2]においては、1994年12月の一ヶ月分に「とか」が121例存在した。引用の用法が非常に多い。#9のように、「とか。」という形が多く(37例)、新聞特有の言い回しとなっている。伝聞を表していると言える。「とかで」(3例、#10)という形もある。

#9 「昨年より多い三、四十件になった」とか。(資料[2], 12/31, 本紙地経面, 大阪朝刊社会面)

#10 お茶屋が出来たとかで, (資料[2], 12/28, 本紙地経面, 関西トレンドィ)
また、#11のように「言う」などの引用動詞に係っていくものが数多く見られた。

#11 情報ハイウエーとか言うて (資料[2], 12/20, 本紙地経面, 関西トレンドィ)

#11は、「情報ハイウエー」とはっきり言うのを避けた言い方になっている。引用でも、「AとかBとか言う」のような並列の形になることもある。

“引用”という場合には、二つのことを分けて考えなければならない。一つは、「とか」の前だけ見て引用と分かるものである。鍵括弧がついている、文として完結している、などが目安になる。#12のようなものがその例である。

#12 「ここを一部取ってくれる？」とか言う。(資料[2], 12/2, 本紙朝刊, p. 7)

もう一つは、「とか」の前だけ見ても分からないもので、#11や前々頁の『岩波国語辞典』の「橋沢とかいう人」のように、「とか」の係り先である述語が引用動詞であるので引用だと分かるものである。後者のようなものを“引用”とすることには議論があるかもしれないが、ここでは、このようなもの、もっと広くとれば命名のようなもの(「〜と名付ける」)も“引用”という用語で記述する。#12は引用動詞を伴ってもいるが、#13のように、引用動詞を伴わないものもある。

#13 女子推薦など特別制度を設けないまでも「指定校推薦の中に女子校を増やしている」(武蔵工大)とか、「学生向けパンフレットに女性を多く登場させ、アピールしている」(芝浦工大)など知恵を絞っている大学も多い。(資料[2], 12/13, 本紙夕刊, p. 13)

引用を除く単独用法は数例しかない。資料[1]に単独用法が多く現れたのと対照的である。

また、並列でも単独でも、直後に体連語を従えて、その体連語の具体的内容の例示をしている用法がある。例えば#14においては、「非自民とか反自民とか」という表現が、「冷戦構造の考え方」の内容を例示していると言える。#15も、これは単独のものであるが、同様である。トカ付きの体連語と後ろの体連語を合わせて体連語とするルールが必要である。

#14 道内はいまだに非自民とか反自民とか冷戦構造の考え方を継承している (資料[2], 12/10, 本紙地経面, 北海道)

#15 いや、驚異とかそういうことはない。(資料[2], 12/28, 本紙朝刊, p. 2)

#16も似ているのだが、「長生きしてね」は、気持ちではなく、メッセージの内容ではないと思われる。構文的に解決するには、「とか」のついた部分を情況語（副詞的修飾成分）と解釈して、続く部分全体に係るとし、意味的にはその中のメッセージの内容を例示したもの、と説くことになる。

#16 「長生きしてね」とか、ふだんなかなか言えない感謝の気持ちをメッセージにした。（資料〔2〕, 12/22, 本紙夕刊, p.14）

先の#13も、情況語として解釈した方がよい例である。「知恵を絞っている」その内容が「～とか～など」に現れている。これら、直後の体連語に係ったり、情況語として働くという構文的性格は、「など」と重なるものである。

以上をまとめると、まず、「とか」の前にくる要素としては、体連語・句・文（引用）のレベルのものが、「とか」がついて体連語を形成する。引用を除けば、並列が基本である。つまり、水谷文法の用語で言えば、体連語の並列であれば並べ体連語に、句の並列であれば並置体化連語になる。しかし、特に話しことばにおいて単独の用法が多く見られる。単独用法について、以下では体副形成子と同様、体連語1を形成するものとした。並列は「AとかBとか」「AとかB」の形が一般的だが、「AとかBなど」の形も散見される（#13のようなもの）。このあたりをCFGで書くとしたら、次のようになる。

並べ体連語 → 体連語 トカ 体連語 トカ
並べ体連語 → 体連語 トカ 体連語 ナド
並べ体連語 → 体連語 トカ 体連語
並べ体連語 → 体連語 ダトカ 体連語 ダトカ
並べ体連語 → 体連語 ダトカ 体連語
体連語1 → 体連語0 トカ
並置体化連語 → 句 トカ 句 トカ
並置体化連語 → 句 トカ 句 ナド
並置体化連語 → 句 トカ 句
体化連語 → 句 トカ
引用 → 「(引用)」 トカ
並べ引用 → 「(引用)」 トカ 「(引用)」 トカ
並べ引用 → 「(引用)」 トカ 「(引用)」 ナド
並べ引用 → 「(引用)」 トカ 「(引用)」

上記ルールでは、便宜的に「 」付きの表現のみを引用としてくくりだしているが、句と書かれたものにも引用に該当するものが多々ある。前述の通り、述語が「言う」系統のもの（引用動詞）は、引用として意識される。例えば、上記「並置体化連語 → 句 トカ 句」のルールが適用できそうな例は資料〔2〕中に10例存在したが、その係り先は「という」「といった」「との」のいずれかであった。

#17 民宿「雪の宿」をやるとか、雪水生活情報センターをつくるとかして、雪国ら

しい雪との共存の道をさらに探してみたいと考えています。(資料[2], 12/23, 本紙地経面, 新潟)

は、「並置体化連語 → 句 トカ 句 トカ」が適用できる例だが、動詞「する」に係っていて、並置体化連語としての代表的なふるまいをみせている。が、「体化連語 → 句 トカ」が適用できる、

#18 あの内閣ではやれないだろうとか、いろいろ言われているから。(資料[2], 12/20, 本紙朝刊, p.3)

は、「言う」という動詞に係っていて、引用ととれる。つまり、「とか」のついた成分が、何に係っていくかで、性質が異なってくる。

「とか」がついて出来た要素が、文の中でどのようなふるまいをするかを見てみると、並べ体連語・体連語1は、格表示を伴って格成分になったり、助詞「の」を伴って連体修飾成分になったり、助動詞を伴って述語になったりする。ここまでは、一般の体連語と同じである。違うのは、情況化されて情況語になったり、直後の体連語にかかっている場合である。これらは意味的には、うしろの述語なり体連語なりの内容を例示するものである。さらに、「橋沢とかいう人」のように「言う」系統の動詞が来ると、引用の様相を呈してくる。

並置体化連語・体化連語の、一般の体連語との違いは、そのまま「する」系統の動詞に接続できること(#17のような表現)で、これは、水谷(1991)にルール化されている。情況化されて情況語になったり、直後の体連語にかかったりもする。#18のように「言う」系統の動詞が来ると、引用の様相を呈してくる。

引用は、基本的には、助詞「と」を従えて、あるいは従えずに(最後に「とか」が付いているものは基本的に「と」を従えずに)、引用動詞にかかっていく(#19, #20, #21)。連体修飾成分になるものもある(#22)。情況化されて情況語になったり(#23)、直後の体連語にかかるものもある(#24)。

#19 「おれは」とか「私は」と言わない。(資料[2], 12/25, 本紙朝刊, p.11)

#20 「大騒ぎして大蔵省に圧力をかけよ」とか「自民党の森幹事長だけでなく、加藤政調会長にもお願いしておくように」とアドバイスする姿も。(資料[2], 12/14, 本紙朝刊, p.5)

#21 二〇一〇年までに全国に光ファイバー網を張り巡らせるとか、市場規模は百二十三兆円になるとかぶち上げた。(資料[2], 12/26, 本紙夕刊, p.5)

#22 英国資本が対香港投資に消極的になったとか香港政庁の高官が海外脱出しているとの話も聞くが、(資料[2], 12/16, 本紙朝刊, p.11)

#23 「こんなに注文を取って作りきれぬのか」とか「とにかく人が足りない」とか、別世界の声を聞いているようだ。(資料[2], 12/12, 本紙夕刊, p.5)

#24 「重いお酒を男性と同じように運ぶので大変」とか「水仕事が多くて手が荒れがち」など悩みもある。(資料[2], 12/26, 本紙夕刊, p.8)

#23は「」内のような声を聞いて、それが別世界の声のようだ、と言っている。構文

的には、「～とか～とか」のあとが切れたような形になっていて、一種の省略ともとれる。#24は、直後の「悩み」の内容を説明するものとして「～とか～など」を捉えることができるものである。(#21, #22は、一旦は並置体化連語と認識されるものであるが、前述の通りこれらも広く引用と捉えられる。)

このように、書きことば・話しことばを総合した中で「とか」を捉えることができるが、中でも、「体連語1 → 体連語0 トカ」が適用でき、かつそれが格成分として用いられることが多いのが、話しことばの特徴と言えるのではなかろうか。

2. 「なんか」「なんて」の用法

「なに」からできたことばに、「など」(ナニ^へト→ナンド→ナド), 「なぞ」(ナニ^へゾ→ナンゾ→ナゾ), 「なんか」(ナニ^へカ→ナンカ), 「なんて」(ナニトテ→ナンテ) がある。これらについて、水谷(1991)では、「体副形成子に入れてよい。」(p.96)としている。が、これらの構文的性質は同じではない。

「なんか」の、助詞としての働きについて、『岩波国語辞典』第五版には「②〔副助〕「など」と同じ。」と記されている。『新明解国語辞典』第三版にも、「一(副助)「など」の口語的表現。」とあり、「など」の働きと同一視されている。

「なんて」の、助詞としての働きについても、『岩波国語辞典』第五版には「②〔副助〕「など」に同じ。」とあり、「など」の働きと同一視されている。『新明解国語辞典』第三版には、以下の四つの意味が書かれており、「など」との関係が述べられつつもそれ以上の意味が記述されている。

なんて(副助)〔俗〕

①「などと」の変化。「いやだ一言えないよ・田中—いう人は知らない」

②「などとは」の変化。「彼が病気だ—うそだ」

③「など」の変化。

「この着物にこの帯—どうかしら・彼をだます—[=などということは] 悪いよ」

④その真偽について意外に思う気持を表わす。

「彼が医者だ—!!・今ごろ断わる—・近いうちに地震が有る—、そんなばかな話が!!」

「など」に類似しつつも違う、ということを明らかにするために、まず「など」の使われ方を調べてみた。

2. 0. 「など」

『岩波国語辞典』第五版には「〔副助〕例示するのに使う語。」と記され、「イ 事物を示して他の同類の代表とする時に使う。」と「ロ ある事物を取り立てて示すのに使う。」の二つの項目が設けられている。『新明解国語辞典』第三版には、「(副助) それだけに限らないが、という気持をこめて、例示することを表す。」と記され、国研(1951)には、「なぞ」「なんぞ」「なんか」も含めて、次の二つの用法が書かれている。

①例示と総括

- ②ある事物を例示し、それを軽しめて扱う言い方（否定的な内容または反語的な内容を表現し、もしくは、けんそんした言い方をする時に用いられる）

丸山（1991）で筆者は、ナドをナゾ・ナンカとひとまとめにして、“例示”（#25）と“強調”（#26）を表すものとして議論した（意味分類は近藤（1983）のものを採用）。

#25 銀行などの書記

#26 もう月などあるものか

岩波、国研（1951）の二分とはほぼ同じ主旨である。水谷（1991）では「など」を体副形成子としており、

体連語1 → 体連語0 体副形成子

体連語1 → 句 体副形成子

のルール of 適用を受けるものと位置づけている。

資料〔2〕の調査では、94年12月31日の1日分に232例現れた。最も多かったのが格助詞を従えて格成分になったもので、81例、2番目が、「とか」のところで述べたような、直後に体連語を従えた形（#27のようなもの）で、65例存在した。

#27 「初期サインは」「カウンセリングの面談料は」など具体的な質問に対し、（資料〔2〕、12/31、本紙朝刊、p.30）

3番目は、助詞「の」を従えて連体修飾するものである。また、情況語として処理した方がよいものには、#28、#29のようなものがあった。

#28 アジアからの留学生は、韓国百七十七人、中国百五十七人、台湾四十九人、マレーシア十六人など、圧倒的に多い。（資料〔2〕、12/31、本紙朝刊、p.27）

#29 「適正で効率的な政府の新進党か、肥大化した非効率政府の与党か」「生きがいのある福祉社会をつくる新進党か、福祉後退・負担の増大を招く与党か」などと、与党との違いを鮮明にしようとしている。（資料〔2〕、12/31、本紙朝刊、p.2）

#28は、「圧倒的に多い」ということの具体的内容を「など」の前で示している。#29は、情況化助詞として「と」を付加した形になっている。

「など」の前に来る要素は、体連語が多い。中でも、並置体連語（並べ体連語）が多く来ることが、特徴として挙げられる。列挙したもののあとに付加することで、それ以外にもあるという含みを持たせる。一方、体連語の他に句のレベルのものもあり（#30）、また、文のレベルである“引用”のこともある（#27、#29）。引用動詞に続く場合は、「とか」と違って、「と」を伴うのが普通である。

#30 金利を大きく引き上げるなど対応を急いでいる。（資料〔2〕、12/31、本紙朝刊、p.1）

以上をまとめてCFGで記すと、次のようになる。

体連語1 → 体連語0 ナド

体連語1 → 並置体連語 ナド

体連語 1 → 句 ナド

体連語 1 → 文 (引用) ナド

こうしてできた体連語 1 は、一般の体連語と同様に格成分、述語、連体修飾成分になる他、直後の体連語に係っていたり、情況語になったりする。意味としては、情況語になる場合や、直後の体連語にかかる場合には、“強調”ではなく、“例示”となる。

その他、他の副助詞と同様に、格助詞のあと、「ている」の間、動詞連用形と「する」の間、形容詞連用形と「ない」の間などに現れ得る [丸山 (1991)] が、資料 [2] の調査にはなかった。

2. 1. 「なんか」

「なんか」は、前に述べたように、「など」とその働きが同じであると説かれることが多いが、直後に体連語を従える用法がない、情況語の用法がない (局面連語になることはある)、引用の用法がないという点で、「など」とは異なる。つまり、「など」の用法の一部を担っているものということができる。

「なんか」は、資料 [2] では、94年1年間分に178例存在した。最も多かったのが、格助詞を伴わずに格成分となっているもので、116例あった。その内、係り先が句複合のものが14例、係り先が単独述語の中で述語との関係がガ格のもの55例、ヲ格のもの45例、ニ格のもの2例であった。2番目に多かったのが格助詞を伴って格成分になっているもので33例、3番目が係助詞だけを伴って格成分になっているもので11例であった。これら、格助詞や係助詞を伴うものが多いことから体副形成子としての性質がみてとれる。

「なんか」の前の成分は体連語のみで、句や文は来ない。したがって、体副形成子としての「なんか」は、次のルールのみで律せられる。

体連語 1 → 体連語 0 ナンカ

格成分でないものとしては、時の成分が2例、その他、ナドのときには例のなかった、次のようなものが存在した。

格表示 → 格助詞 ナンカ (#31)

用連語 → 用連語 テ ナンカ イ ナイ (#32)

句 → 述素/相/ ナンカ ナイ (#33)

#31 宝石の買い付けになんかいかないよ。(資料 [2], 12/24, 本紙夕刊, p. 5)

#32 私は別に外見にこだわってなんかいないの。(資料 [2], 9/12, 本紙夕刊, p. 13)

#33 むなしくなんかいないよ。(資料 [2], 1/6, 本紙朝刊, p. 2)

これらの例は、否定と呼応している。上記中央のルールは本来「寝てばかりいる」のような表現を説明するために「用連語 → 用連語 テ 副助詞 動詞特類 2 (イル)」として考えたが、「なんか」の場合にはそのスコープ (作用範囲) を「ない」まで広げて考えなければならない。(水谷 (1991) で述素否認を設けた事情に類似している。)

さらに「たり」に続く形がある。

#34 ペこぺこお辞儀したりなんかするのもみっともないわよ。(資料[2], 9/12, 本紙夕刊, p.13)

「とか」に「たりとか」という例があったのと似ている。並置体化連語のルールに追加する必要がある。

「など」より「なんか」の方が、単なる“例示”ではなく“強調”の例が多い。が、近年の話しことばにおいては、典型的な“例示”や“強調”から離れた用法が多くなっている印象を受ける。沼田(1986)の言う“柔らげ”の用法が増えつつあるのではないか³⁾。単にぼかして言うために用いる「とか」と同じような現象が見られる。例えば、次のような例がある。

#35 三富温泉なんかいかがでしょう。(資料[1], p.552)

#36 ロマンسカーなんか乗るのがいいんじゃないかなあ。(資料[1], p.497)

#37 トロなんか本当にとろけるようじゃないですか。(資料[2], 4/23, 本紙地経面, 関西トレンドィ)

「～なんかいいね。」のように、肯定的な評価が続くものがかなりある。同じ「僕なんか」でも、#38は軽しめている言い方だが、#39は得意さを感じる。

#38 僕なんか音楽大学も出てないし、簡単に言えば素人あがりですから。(資料[2], 8/9, 本紙地経面, 関西トレンドィ)

#39 僕なんかまだ若いからヤル気満々というか、どうだ、どうだってやっちゃう。(資料[2], 6/26, 本紙朝刊, p.15)

2. 2. 「なんて」

国研(1951)は、「なんて」について、次のような説明をしている。

〔I〕格助詞

①次に来る動作・作用の内容を示す。例示的に、または軽しめて。

「死んだなんて、いい加減なうそをつくのでしょう。」

②同格の関係で次の語を修飾する。無視または軽視する気持ちを含む。

「ピンク・フラワーなんて喫茶店、知らないわよ。」

〔II〕係助詞

ある事物を例示し、それを無視または軽視しようとする気持ちを示す。

「歌なんて気が向いた時じゃなくちゃ歌えやしないわ。」

3) 沼田(1986)では、「など」を“並列詞”と“とりたて詞”に分け、さらに“とりたて詞”の用法として“柔らげ”と“否定的強調”を挙げている。

並列詞

「庭にバラの花などを植えた」

とりたて詞—柔らげ

「田中さんなどもう決まった相手がいるんじゃないかなあ」

「これなどよくお似合いになると存じますが」

—否定的強調「花子はスチュワーズなんかにあこがれている」

「女にあまったれるなんて、男らしくないわよ。」

つまり、引用にかかわるものを格助詞「と」との関連で“格助詞”とし、その他のものを「は」などとの関連から“係助詞”にしたものである。しかし、[II]の2番目の例は、他の係助詞にない構文的位置を占めている。副助詞「など」には置き換えられるが、係助詞には置き換えられない。

「なんて」による引用が「など」と違うのは、「と」あるいは「という」を含んだ用い方をするという点である。#40の例は、「などと」にあたる用法で、#41は「などという」にあたる用法である。

#40 夜道に気をつけろよ、なんて言われてね。(資料[2], 12/28, 本紙朝刊, p. 2)

#41 「東京・中野のサトルです」なんて具合に。(資料[2], 12/27, 本紙夕刊, p. 13)

また、「など」「なんか」の違いとして一番大きいのは、格助詞の前に位置することができないことである。「Aなどが」「Aなんかが」とは言えても「Aなんてが」と言うことはできない。そのことが国研(1951)で「なんて」を係助詞とした大きな要因であろう。『新明解国語辞典』第三版で「などとは」の変化」としたように、「は」の要素が入っていて係助詞的になっているのだと思われる。句を受けて情況語になる場合も、「など」とは違って、後ろの部分の例示をしているのではなく、後ろの部分が「なんて」の前の部分の説明、もしくは前の部分から導かれた結論のようなものになっている(#42)。

#42 自殺者がまた出るなんて今の日本はおかしくなっている。(資料[2], 12/24, 本紙地経面, 名古屋夕刊社会面)

うしろが省略されて用いられることが定着すると、終助詞的になる(#43)。

#43 こんなことが起きるなんて。(資料[2], 12/7, 本紙地経面, 関西トレンドィ)

#44の場合は、「そこからわざわざまた出かける」ことが「めんどろ」であるという格関係がある。「なんて」の中に「など」にあたる体副形成子的な要素があるために、句がそのまま用いられて、体連語のようにふるまうことが可能になっている。

#44 そこからわざわざまた出かけるなんてめんどろ。(資料[2], 12/12, 本紙夕刊, p.10)

融合化していて、ルール化が困難な現象である。

#45 こんないじめがあったなんて信じられない。(資料[2], 12/11, 本紙地経面, 名古屋朝刊社会面)

も同様の現象である。「いじめがあった」ことが「信じられない」。前が体連語の例としては、

#46 二十歳を超えてマンガなんて読むのは、日本人だけ(資料[2], 12/19, 本紙夕刊, p.8)

のようなものがある。「マンガを読む」というヲ格の関係がある。「なんか」と近い用法

である。但し、「なんか」が体副形成子であるのに対して、「なんて」は係助詞の仲間である。#46の場合は軽しめている意味合いがあるが、「なんて」も「なんか」と同様、軽しめる場合以外にも用いられる（#47, #48）。

#47 富士山の見晴らしのいいところなんてありますか。（資料[1], p.554）

#48 わたしなんて, たくさん作ったらドンて出しちゃう感じ。（資料[1], p.372）

これらのルール化を試みれば、以下のようなになる。まず、#40のような引用については、以下のようなルールが考えられる。

述素 → 引用 ナンテ 述素（述語：引用動詞）

これは、「と」や「とか」に類するものである。「と」や「とか」も引用助詞としてまとめれば、以下のようなになる。（もちろん、引用の仕方が、「と」「とか」「なんて」ではそれぞれ異なる。）

述素 → 引用 引用助詞 述素（述語：引用動詞）

#41の引用は、「と」や「とか」にはないもので、次のようなルールが考えられる。

体連語 → 引用 ナンテ 体連語

格成分に付く「なんて」（#46, #47, #48）については、これを体副形成子とみることはできないので、係助詞としての扱いをすることになる。

格表示 → ε, ナンテ

格表示 → 格助詞 ナンテ

これは、以下のルールの中に取り込まれる。

格表示 → ε, 係助詞

格表示 → 格助詞 係助詞

#42の現象については次のルールで律せられる。

情況語 → 句 ナンテ

#43は断片的な文と言える。情況語だけで文ができていると捉えることもできるし、「なんて」が終助詞化していると捉えることもできる。（接続助詞が終助詞化して用いられることが話しことばでは珍しくない。「～のに。」「～けど。」など。それと似ている。）

#44については扱いがむずかしく、話しことばに多い融合化をルール化することの困難さを示していると言える。「なんて」を分解して「などということは」のようにしてから分析すれば可能である。（ちなみに、水谷（1991）は山田と同じく語源主義であるから、分解する方針をとっている。例えば、「美しからず」は「美しく」「あら」「ず」に分解して考える。但し、「なんて」の場合は、語の成り立ちとしては「なにとて」であって、「などということは」というのは、そのような表現に相当するというだけである。そこに大きな違いがある。）

3. 「とか」「など」「なんか」「なんて」を対照して

筆者は、話しことばの文法の枠組みの基本は、書きことばの文法の枠組みの基本と同一であると考えている。本稿では、具体的に、「とか」「なんか」「なんて」のふるまい

を観察してきた。これらを文法の枠組みの中でどのように位置づけたらよいか。

「とか」は、そもそも並列表現を形成する機能を持つが、それが単独で用いられることが定着すると、体副形成子に近い性質を帯びるようになる。「など」「なんか」と近い存在になる。一方、引用表現を取り得るという点では「とか」「など」「なんて」に共通点があるが、引用表示の機能の点では「とか」と「なんて」に、その機能が備わっており、「など」そのものにはないと言えよう。「など」「なんか」「なんて」が否定的な意味合いを持つことがあるのに対して、「とか」には否定の意味合いはない。このように類似点・相違点が存在する。

それぞれの用法を簡条書きにして示すと、次のようになる。

「とか」

- 1) 並列（並べ体連語・並置体化連語を形成する）
- 2) 体副形成子としての機能（体連語1を形成する）
- 3) 引用助詞としての機能（引用表現を受けて、引用動詞につなげる—引用の内容を不明確に提示する）
- 4) 「とか」の付いた並べ体連語・並置体化連語、体連語1が、格成分・連体修飾成分・述語として使用される（一般の体連語と同じ用法）
- 5) 「とか」の付いた引用表現が、連体修飾成分として使用される
- 6) 「とか」の付いた並べ体連語・並置体化連語、体連語1、引用表現が、直後の体連語の内容を例示する（直後の体連語と共に体連語を形成する）
- 7) 「とか」の付いた並べ体連語・並置体化連語、体連語1、引用表現が、情況語として働き、うしろの述語の内容を例示する

「など」

- 1) 体副形成子としての機能（体連語1を形成する）
- 2) 引用表現に付く（引用表現に付いて、引用の内容が例示であることを示す。引用表示の機能はない）
- 3) その他、他の副助詞と同様に、格助詞のあと、「ている」の間、動詞連用形と「する」の間、形容詞連用形と「ない」の間などに現れ得る
- 4) 「など」の付いた体連語1が、格成分・連体修飾成分・述語として使用される（一般の体連語と同じ用法）
- 5) 「など」の付いた引用表現が、連体修飾成分として使用される
- 6) 「など」の付いた体連語1、引用表現が、直後の体連語の内容を例示する（直後の体連語と共に体連語を形成する）
- 7) 「など」の付いた体連語1、引用表現が、情況語として働き、うしろの述語の内容を例示する。

「なんか」

- 1) 体副形成子としての機能（体連語1を形成する）

2) その他、他の副助詞と同様に、格助詞のあと、「ている」の間、動詞連用形と「する」の間、形容詞連用形と「ない」の間などに現れ得る

3) 「なんか」の付いた体連語1が、格成分・連体修飾成分・述語として使用される（一般の体連語と同じ用法）

「なんて」

1) 体副形成子+係助詞の機能（「などは」に当たる用法）

2) 引用助詞としての機能

2) -1 引用表現を受けて、引用動詞につなげる—引用の内容が例示であることを示し、時に軽んじているニュアンスを添える。（「などと」に当たる用法）

2) -2 引用表現を受けて、体連語につなげる—体連語の内容を示す。（「などという」に当たる用法）

3) 「なんて」の付いた表現が、情況語として働き、うしろの述語で、「なんて」の前の部分を説明する、もしくは前の部分から導かれた結論をうしろで述べる。

簡単な表にまとめると次のようになる。

| 用 法 | と か | ナ ド | ナンカ | ナンテ |
|--|-----|-----|-----|--------------------|
| 並 列 | ○ | × | × | × |
| 体副形成子としての機能 （形成された体言相当表現 が、格成分・連体成分・述 語として働く） | ○ | ○ | ○ | × |
| その他の副助詞の機能 （格助詞のあと、「ている」 の間、動詞連用形のあと、 など） | × | ○ | ○ | × |
| 体副形成子+係助詞の機能 | × | × | × | ○(ナドハ) |
| 引用 | ○ | ○ | × | ○(ナドト) ○(ナドトイウ) |
| 直後の体言の内容を例示 | ○ | ○ | × | × |
| 連用成分として述語に係る | ○ | ○ | × | ○ |

体副形成子として位置づけられるのは「など」「なんか」であり、「とか」も派生的用法として体副形成子としての働きが見られる。「なんて」はその一部として体副形成子の性質を持つものの、全体としては係助詞と融合したものになっている。引用に関わるの

は、「なんか」を除く三つであるが、そのうち引用表示の機能を積極的に持つのが「とか」「なんて」であり、持たないのが「など」である。「なんて」には「とか」にはない引用用法も存在する（「なんて」2）-2）。直後の体連語の内容を例示する働きがあるのは「とか」と「など」である。情況語になって後ろに係るのは、「とか」「など」「なんて」だが、「とか」「など」が前の部分が後ろの部分の例示を示すのに対して、「なんて」は、後ろの部分が「なんて」の前の部分の説明、もしくは前の部分から導かれた結論のようなものになっている。

4. おわりに

本稿は、話しことばによくみられる助詞「とか」「なんか」「なんて」について観察し、文法の枠組みへの取り込みを図ったものである。主に構文的性質について述べた。今後、意味についてより深く考察する必要がある。また、話しことばには、縮約形・融合形が多く見られるが、そのルール化がむずかしい。これも今後の課題である。

[参考文献]

- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』秀英出版。
近藤泰弘（1983）「副助詞の体系—現代日本語—」『日本女子大学紀要』32。
沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』第2章，凡人社。
丸山直子（1991）「体副形成子としての副助詞」『東京女子大学日本文学』75。
———（1995a）「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19 [8]。
———（1995b）「話しことばの諸相」『音声対話理解 シンポジウム予稿集』（文部省科学研究費補助金重点領域研究「音声・言語・概念の統合的処理による対話の理解と生成に関する研究」平成7年度公開シンポジウム）。
———（1996）「助詞の脱落現象」『月刊言語』25 [1]。
水谷静夫（1991）『稿本 国文法大体』東京女子大学日本文学科。

[資料]

1. 財団法人機械システム振興協会（1992）『平成3年度 音声の知的処理に関する調査研究報告書』。
2. 『日本経済新聞CD-ROM'94年版』。

（まるやま なおこ 本学助教授）